

永久平和

石原莞爾自筆

第143号
(平成30年1月25日)

宣言 (昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

目次

巻頭言.....	1
新年を迎えて.....	仲條拓躬
◆ 全人類を救う大文章.....	2
石原莞爾の王道論と	
淵上辰雄の「派遣日記」.....	野村乙二朗
● 石原莞爾に学ぶ.....	4
人間・信仰・科学.....	木下靖夫
● 満州国は独立国だった.....	6
● SNS.....	坂本進一郎
● 石原莞爾語録.....	8

新年を迎えて

当会会長 仲條 拓躬



新たな年が始まりました。同志・会員の皆様におかれましては、様々な思いを胸に抱きつつお健やかに新春をお迎えのことと存じます。

さて、私は旧年中、予期せざる事に大病を患い2回の手術を行い、一時は心肺停止となりました。しばらく入院していたので学校関係・協会関係の役職からも退こうと考えておりましたが、体の負担にならないよう協力してくれるとの事でしたので引き続きお引き受けることにしました。

当会にしましては財政が苦しい状況で、今号で終刊予定でございましたが、「続けて欲しい」との有り難いお言葉を頂きましたので、今後とも可能な限り発行を続ける所存でございます。

一度はなくなった命ですから少しでも会のお役にたてればと考えております。今、この時点でやれる事をこれから生きる若い世代へ継承していければと決心するところでございます。

さて、当会は少数精鋭でかつ着実に歩み続けて参りました。顧問や先生方々からは、ご助言などを頂きながら会を運営してきましたが、これからは残された若い世代で自らが判断して行動するという非常に厳しい運営環境となっております。

その一方で、会員の確保や質の高い情報の提供など様々な課題が山積しており、会の財政を立て直すことは急務な課題となっております。

また、戦争を体験された方の多くが亡くなられた今、微力ながらもいかにして恒久平和を

現するかを模索してきた我が石原莞爾平和思想研究会の存在意義と役割が重要なものとなってくると確信いたしております。

現在、テロ行為が発生して、いつ何処で自分たちの生活が脅かされるか、まるで予測がつかない混乱と不安定な世界となりました。天変地異が各地で起こり、北朝鮮問題も行き詰まりを見せ明日が期待できない、予測が難しい時代となっております。このような世界の中で生き抜くためには、自国の状況を客観的に把握し、進むべき方向を定め、頭脳と判断で決断をしていかなければならないでしょう。アメリカの核の傘の下で、アメリカのいう事に従っていれば安全な生活が得られる時代ではなくなりました。もはや近隣諸国がそれを許してはくれないうでしょう。今年こそは素晴らしい時代の幕開けとなりたいたいものです。

現在大きな問題になっている、安倍政権による「憲法9条改正問題」や「集団的自衛権の行使容認」また、「北朝鮮の問題」など、これらは全てアメリカから指示されたレポート内容になっていきます。当然ながら日本の国益を前提にしているのです。私たち先の大戦での多くの祖先の尊い犠牲の上に平和な生活があることを忘れてはいけません。恒久平和のため勇気を奮い食い止めなければなりません。これからの日本国が何をなすべきかを考えなければならないと思うのです。

この機をお借りして、同志のご支援にお礼申し上げますと共に、我々の活動にご支持を示して下さっている各方面の多くの方々に深く感謝申し上げます。そして今後とも、一層のお力添えを頂ければ幸いに存じます。

石原莞爾語録 其の三

「石原莞爾のすべて」(菅原一彪・仲條立一著) から石原莞爾語録を紹介致します。

この新国家という問題は、要するに満州における現住民族が、よって新しい国家を造るといふ建前から話が起つたのでありますが、この現住民族といえは、大部分は満州の民衆三千万人でしようが、その他に百萬の朝鮮人、二十萬の日本人あり、これがよつたものが現住民族であつて、これらによつて新国家を造り、その数の差があつても新しい国家を造るものならば、それを進めて行つてもさしつかえないでしょう。将来、国家が成立した上で日本人の国籍をどうするかという問題が国際法上起るかもしれないが、国家を造るまでは現住民族は支那人でもなければ、日本人でもない、朝鮮人でもない、満州人であるという建前で進んで国家を建設していつてよいと思います。国籍問題はこれ以後の問題だと私は思います。

私は個人としては、独立国家になる以上、都督制とか何とかは、やるべきではないと思う。それは、今までの日本は暴戾なる支那軍閥のためには付属地内に屏息されていたのであるが、今度は日支両国民が新しい満州を造るのだから、日本人、支那人の区別はあるべきではない。従つて付属地、関東州も全部返還してしまつて、関東州長官も失業状態ですな。そしてほんとうに一緒になつてやるのであればならぬ。日本の機関は、最小限度に縮小し、できる新国家そのものに日本人も入り、支那人も区別なく入つていくのがよろしいと思う。それができなければ満州新国家

も何もないと思います。

※以上は一九三二年一月、(満州建設について) 日支名士座談会にて

支那事変が起きると、すぐ不拡大主義こういったのです。満州事変の時も内閣(若槻内閣)は不拡大主義でありました。が、あの時の不拡大主義というものは性質が違つております。蘆溝橋の銃声でアツと思つたが、国民全部寢呆けておつたような状態でありました。それでも夢中で不拡大主義、といったのです。けれども昭和十四年七月の、近衛さんが目を醒ましてはつきりと東亜の内乱といった気持は、その寢呆けておつた昭和十二年の日本国民の中にやはりあつたのです。日支間というものは決して喧嘩すべきものでない。東亜の内乱という気持がありましたから、不拡大主義といった。満州事変当時は、当局が英米の圧迫を恐れて、恐ろしいものであるから、これは大変だといつたので不拡大主義といったので、その本質において大きな差があると思います。

満州事変後は、日本には確たる方針なく、日支両国は紛争を重ね、満州建国数年にしてとうとう支那事変になつたのであります。支那事変というものは完全に満州事変の延長であります。日本人は満州事変は終つたと思つてゐる。それは大間違いで、満州事変は断じて終つていないのであります。日本人が自身だけ勝手に終つてゐた。支那では満州独立を絶対に認めない。世界はほとんどの国も認めない。そうして、日本が支那ととにかく平和の状態にあつたのは、上海の停戦協定、塘沽の停戦協定、いかえてみれば休戦状態になつていただけであり

ます。昭和十二年七月、蘆溝橋の銃声によつて、その停戦が破れただけのことであります。

聖戦という言葉は、満州事変の時にも使われましたけれども、国民的なスローガンになつたのは全く今度の支那事変の特徴であります。聖戦というのは満州国の王道の大精神であります。儲けるためや、ある物を奪るためではないのであります。道のための戦いであります。東亜大同のための戦いであります。どうも日本人は素晴らしい。寢呆けていながらとに角、この事変の本質をつかむだけはつかんだ。ところが悲しいかな意識がはつきりしておりませんから、頭では聖戦と考えたが、手足は西洋模倣の帝國主義を抜け切れぬ。未だ今日でも清算できない実況であります。が、口で聖戦といつても、実行は必ずしも直ぐ聖戦であり得るといふことは困難であります。

※以上は一九四〇年三月、京都師団長時代。(満州建国と支那事変)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第143号 平成30年(2018年)1月25日発行